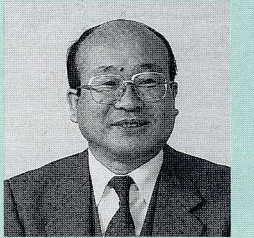


特集

卒業生、修了生を送る

祝辞



広島大学長
原田 康夫

皆さん、皆さんは間もなく本学を卒業、あるいは大学院の課程を終えて社会に出られますが、皆さんの門出に際して一言お祝いを申し上げます。

昨年度広島大学は、この東広島の地に長年の念願であった統合移転を完了し、学内も整備されてきて、日本を代表する大学の一つとしての形が整ってきました。ようやくこうした教育環境、ならびに研究環境が整備された頃に卒業ということ、皆さんにはもう少し早ければよかったのに、という気持ちがあるかもしれません。また、皆さんにとっては、なにかと落ち着かない移転の時期の在学であり、それに伴う種々の不便があったかと申し訳なく思っています。

さて、ここ数年日本にとっては厳しい状況が続きました。そうした不況の中で卒業でありますだけに、皆さんの就職も多くの困難があったようです。しかし、こういう時こそ、過度の不安に怯えたり焦ったりすることなく、待ちの精神としての「平常心」が大切になります。

現代は情報化社会とも呼ばれ、次々に流されてくる情報を正確にキャッチし、それに対処・対応するということが大切ではありますが、淡々として慌てず、また片々たる情報に一喜一憂することなく、物事の一番奥にあるものを見極める「平常心」を自らのうちに育てることこそ、さらに大切なことで

す。一步下がって物事の全体像を把握し、それから行動する「待ち」と「間(ま)」の精神を身につけることこそ、これからの時代には大切だと思います。

二十一世紀は確かに情報化の時代ではありますが、情報が氾濫する社会にあって、何が真実か、何が必要か、今自分は何をなすべきかを直感的に判断するのも、平常心があつてこそです。そのためには、自分が何をしたいのか、何が好きか、自分の内部に問いかけなければなりません。好きなことであればそれが少々難しくても、時間がかかっても、また行く手に立ちほだかる障害があつても向かって行けるものなのです。また、人間好きなことは続けることができます。私自身の経験からもそれが言えます。好きなことをするのであれば、ストレスを覚えることなく日々楽しく生活することが出来ます。

新しい仕事に入ったとき、自分は何が好きなのかを必ず見極め、自らの中に育てていく。この時期を五年単位で継続、学習していけば、どのような仕事でも必ず専門性を高めていけるものです。また好きなものを通じて目標を高く設定することも大切で、これが「志を高く持つ」ということになるわけがあります。

日本では古来、和魂漢才ということも言いました。明治以降では和魂洋才とも言われています。漢才というのは漢文を用いて文章を表す技術、ま

た暦法や法律などの諸知識を指しました。洋才というのほほこれと同じく、欧米の科学技術や西洋語を理解する能力を指すと考えてよいでしょう。こうした技術や知識によって日本の文化は大きな発展を遂げました。

ただし日本人は、そうした漢才(かざえ)や洋才を大切と考えただけでなく、そこに和魂(わこん)をとまなわせることを肝要と考えました。和魂とはなんでしょう。それは科学や経済、また法律などに関する個々の知識を統合し体系づける能力で、いうなれば「知識」に対する「知恵」を言ったものだといはれます。

もうすぐ二十一世紀です。二十一世紀は「個人の時代」だと思われまふ。これまでの歴史の中では、大衆という名のもとに埋もれていた個人が、実際に社会を動かす原動力になるものと思われまふ。皆さん自身が二十一世紀を動かすのであり、二十一世紀をデザインするのである。一人ひとりの願望が未来をつくる時代に入った、と言えまふ。

個々人の高い志が社会を動かす時代に入っただけに、皆さんには自らの感性を不断に磨き、鋭い直感力と、何物にも動じない平常心を身につけてもらいたいと思つていきます。広島大学で学んだ知識と知恵をフルに活用して、今後の人生を有意義なものにして下さい。ご卒業、本当におめでとう。

自省しながら歩こう

学生部長 西村清巳



ヘルムート・シュミット氏が、一年の広島大学統合移転完了記念特別講演で「あなたたちは明日とそれに続く日々に責任を持って」と言った。その気概と備えがあるだろうか。社会に出たら、自分と自分の住む社会に責任を持つことになる。自分という存在を前後左右に掘り下げて見て、自省しながら歩いてもらいたい。ゆめゆめ「自分は一人前だ。自分は能力があるんだ。自分は何でもできるんだ」とうぬぼれてほしくない。社会の「やさしさ」と「きびしさ」の事例を新聞の切り抜きで紹介し、饒(じょう)としたい。

ナイロビ生活十六年の岸田袈裟(せうさ)さん。「文明社会が忘れていった落穂(らくそう)を拾い、心の栄養としているのが私のアフリカ生活。徹底した助け合いの精神が、アフリカの悠久の歴史を支える大きな力だと感じる」。

ザンビアボランティア「難民を助け

る会」五年の関さん。「祖父母、両親、子どもという順番を守って食べる風習。人々は優しくわずかな物で人をもてなそうとする。教えられることが多く私は難民に助けられる会」。

松山幸雄氏の国際羅針盤「米国の大学の授業は、討議への参加が筆記試験に劣らぬ比重を占めるから、学生は私語や居眠りをするところの話ではない」「国際社会の知的対決でモノをいうのは知識ではなく、知恵、論理的思考、瞬発力、説得力、獨創性、そしてユーモアのセンスだ」。

今の私たちはこのどちらの人生にも「やられた」という自戒の念を持つ。思い上がりを捨てよ。うぬぼれを捨てよ。毎日最低の自分から出発しよう。手話スピーチコンテストを聞いた天声人語氏の「終日、人間っていいものだと思ひ続けた」という場面に一つでも多く巡り合いたい。

三月は巣立ちの季節
毎年このころになると、何か新しいことが起こりそうな気がする。
自分の将来が開けそうな気がする。
しかし、巣立つ鳥が年々小さくなると感じるのは歳のせいでしょうか。
筋力がなく、自分の意思どおりに飛べない幼鳥が多くなった気がする。
でも飛び立とう。
飛べば、筋力は自らつくものだから。
今号では卒業生・修了生に広島大学に対する思いや、体験談を語っていただいた。また学長をはじめ部局長からは饒の言葉をいただいた。先輩たちの学生生活を参考にし、学部や研究科に対する部局長の期待を理解し、残った学生がさらに自己を磨くことを期待する。